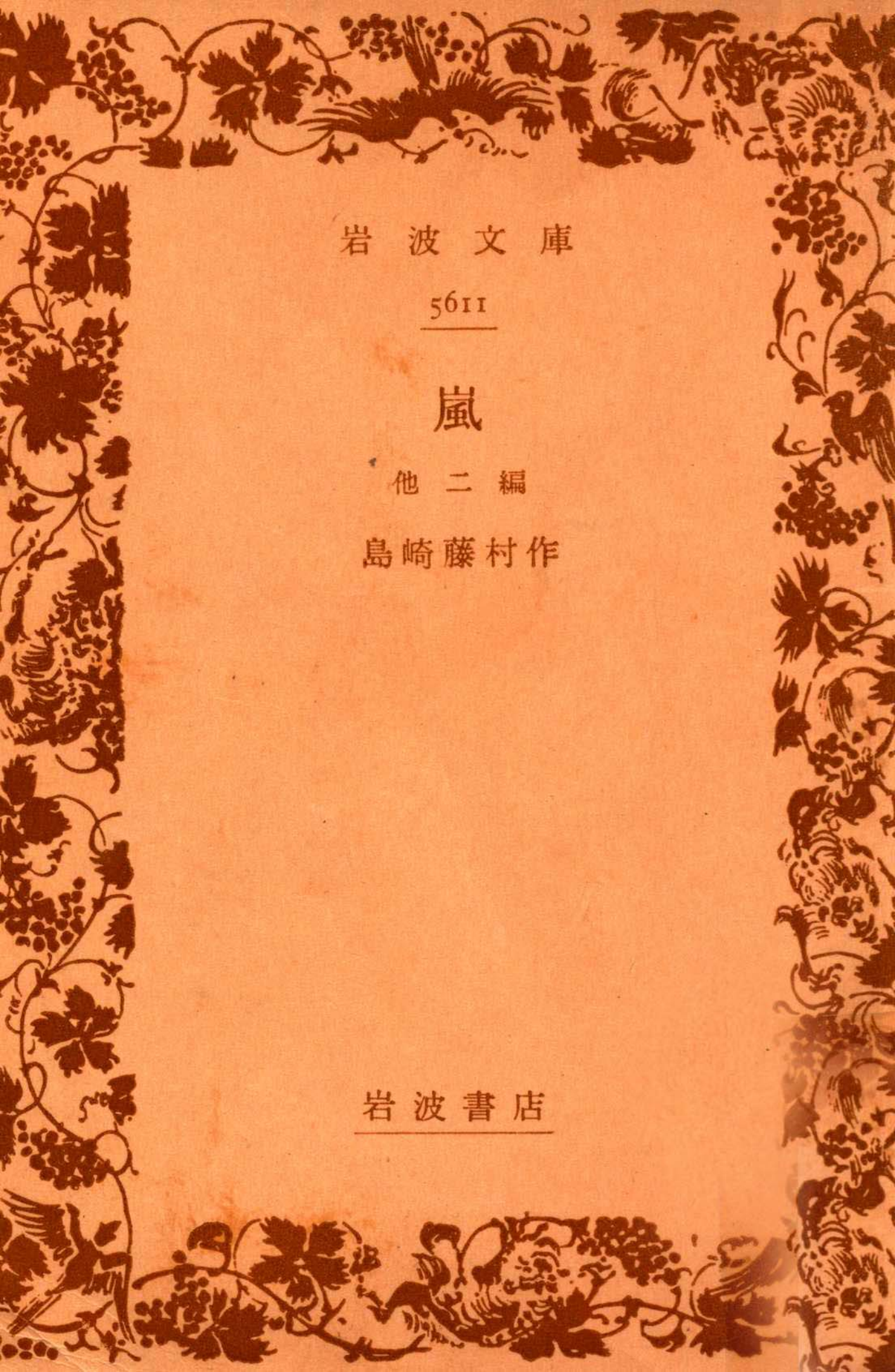




岩波文庫

5611

嵐

他二編

島崎藤村作

岩波書店

昭和三十一年三月二十六日 第一刷発行
昭和四十四年九月一六日 第二三刷改版発行 ©

嵐他二編

定価★

作 者 島崎 藤村

発行者 東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
岩波 雄二郎

印刷者 東京都青梅市根ヶ布三八五番地
白井 倉之助

発行所

東京都千代田区 株式会社 岩波書店
神田一ツ橋二丁目三番地

落丁本・乱丁本はお取替いたします

精興社印刷・桂川製本

岩 波 文 庫

5611

嵐

他 二 編

島 崎 藤 村 作

岩 波 書 店

目次

伸び仕度 五

嵐 一九

分配 全

解説 二七

伸

び

支^じ

度^{たく}

十四五になる大概の家の娘がそうであるように、袖子そでこもその年ごろになって見たら、人形のことなどは次第に忘れたようになった。

人形に着せる着物だ襦袢じゆばんだと言って大騒ぎしたころの袖子は、いくつそのために小さな着物を造り、いくつ小さな頭巾ずきんなどを造って、それを幼い日の楽しみとして来たかしのれない。町のおもちゃ屋から安物を買って来てすぐに首のとれたもの、顔がよごれ鼻が欠けするうちにオバケのようになり気味悪くなって捨ててしまったもの——袖子の古い人形にもいろいろあった。その中でも、父ととさんに連れられて震災前の丸善まるぜんへ行った時に買ってもらって来た人形は、いちばん長くあった。あれはドイツのほうから新荷が着いたばかりだという種々なおもちゃと一緒に、あの丸善の二階に並べてあったもので、異国の子供の風俗ながらに愛らしく、格安かくやすで、しかも丈夫にできていた。茶色な髪をかぶったような男の子の人形で、それを寝かせば目をつぶり、起こせばぱちりとかわい目を見開いた。袖子があの人形に話しかけるのは、生きている子供に話しかけるとはほとんど変わりがなくらいであった。それほど好きで、抱き、擁かかえ、なで、持ち歩き、毎日のように着物を着せ直しなどして、あの人形のためには小さなふとんや小さな枕まくらまでも造った。袖子が風邪かぜでも引いて学校を休むような日には、彼女の枕もとに足を投げ出し、いつでも笑ったような顔をしながらおとぎ話の相手になっていたのも、あの人形だった。

「袖子さん、お遊びなさいな。」

と言って、ひところはよく彼女のところへ遊びに通って来た近所の小娘もある。光子さんと言って、幼稚園へでもあがろうという年ごろの小娘のように、額のところへ髪を切りさげている子だ。袖子のほうでもよくその光子さんを見に行つて、暇さえあれば一緒に折り紙を畳んだり、お手玉をついたりして遊んだものだ。そういう時の二人の相手は、いつでもあの人形だった。そんなに抱愛の的であつたものが、次第に袖子から忘れられたようになって行つた。そればかりでなく、袖子が人形のことなどを以前のように大騒ぎしなくなったころには、光子さんともそう遊ばなくなった。

しかし袖子はまだようやく高等小学の一学年を終わるか終わらないぐらいの年ごろであつた。彼女とても何かなしにはいられなかつた。子供の好きな袖子は、いつのまにか近所の家から別の子供を抱いて来て、自分の部屋で遊ばせるようになった。数え歳の二つにしかならない男の子であるが、あのきかない氣の光子さんに比べたら、これはまたなんというおとなしいものだろう。金之助さんという名前からして男の子らしく、下ぶくれのしたその顔に笑みの浮かぶ時は、小さなえくぼがあらわれて、愛らしかつた。それに、この子のよいことには、袖子の言うなりになつた。どうしてあの少しもじつとしていないで、どうかすると袖子の手におえないことが多かつた光子さんを遊ばせるとは大違ひだ。袖子は人形を抱くように金之助さんを抱いて、どこへでも好きなどころへ連れて行くことができた。自分のそばに置いて遊ばせたければ、それもできた。

この金之助さんは正月生まれの二つでも、まだいくらも人の言葉を知らない。蕾つぼみのようなそのくちびるからは「うまうま」ぐらいしかもれて来ない。母親以外の親しいものを呼ぶにも、「ちゃあちゃん」としかまだ言い得なかった。こんな幼い子供が袖子の家へ連れられて来て見ると、袖子の父ちちさんがいる、二人ある兄にいさんたちもいる。しかし金之助さんはそういう人たちまでも「ちゃあちゃん」と言って呼ぶわけではなかった。やはりこの幼い子供の呼びかける言葉は親しいものに限られていた。もともと金之助さんを袖子の家へ、初めて抱いて来て見せたのは下女げじょのお初はつで、お初の子煩悩こぼんのうと来たら、袖子に劣らなかった。

「ちゃあちゃん。」

それが茶の間へ袖子をさがしに行く時の子供の声だ。

「ちゃあちゃん。」

それがまた台所で働いているお初をさがす時の子供の声でもあるのだ。金之助さんは、まだよちよちしたおぼつかない足もとで、茶の間と台所の間を往ったり来たりして、袖子やお初の肩につかまったり、二人の裾すそにまといついたりして戯れた。

三月の雪が綿のように町へ来て、一晩のうちにみごとに溶けて行くころには、袖子の家ではもう光子さんと呼ぶ声が起こらなかった。それが「金之助さん、金之助さん」に変わった。

「袖子さん、どうしてお遊びにならないんですか。わたしをお忘れになったんですか。」

近所の家の二階の窓から、光子さんの声が聞こえていた。そのませた、小娘らしい声は、春先

の町の空気に高く響けて聞こえていた。ちょうど袖子そでこはある高等女学校への受験の準備にいそがしいところで、おそくなって今までの学校から帰って来た時に、その光子さんの声を聞いた。彼女は別に悪い顔もせず、ただそれを聞き流したままで家へ戻もどって見ると、茶の間の障子しょうじのわきにはお初が針仕事しながら金之助さんを遊ばせていた。

どうしたはずみからか、その日、袖子は金之助さんを怒おこらしてしまった。子供は袖子のほうへ来ないで、お初のほうへばかり行った。

「ちゃあちゃん。」

「はあい——金之助さん。」

お初と子供は、袖子の前で、こんな言葉をかわしていた。子供から呼びかけられるたびに、お初は「まあ、かわいい」という様子をして、同じことをなんどもなんども繰り返した。

「ちゃあちゃん。」

「はあい——金之助さん。」

「ちゃあちゃん。」

「はあい——金之助さん。」

あまりお初の声が高かったので、そこへ袖子の父とうさんが笑顔えがおを見せた。

「えらい騒さわぎだなあ。おれは自分の部屋へやで聞いていたが、まるで、お前たちのは掛け合いじゃないか。」

「旦那さん。」と、お初は自分でもおかしいように笑って、やがて袖子と金之助さんの顔を見くらべながら、「こんなに金之助さんは私にばかりついてしまつて……袖子さんと金之助さんとは、きょうはけんかです、」

この「けんか」が父さんを笑わせた。

袖子は手持ちぶさたで、お初のそばを離れないでいる子供の顔を見もった。女にもしてみたほどの色の白い子で、優しい眉、すこし開いたくちびる、短いうぶ毛のままの髪、子供らしいおでこ——すべて愛らしかった。なんとなく袖子にむかつてすねているような無邪気さは、いっそうその子供らしい様子を愛らしく見せた。こんないじらしさは、あの生命のない人形にはなかったものだ。

「なんと言つても、金之助さんは袖ちゃんのお人形だね。」

と言つて、父さんは笑つた。

そういう袖子の父さんは鰥で、中年で連合に死に別れた人にあるように、男の手一つでどうかこうにか袖子たちを大きくして来た。この父さんは、金之助さんを人形扱いにする袖子のことを笑えなかった。なぜかなら、そういう袖子が、実は父さんの人形であつたからで。父さんは、袖子のために人形までも自分で見立て、同じ丸善の二階にあつたドイツ出来の人形の中でも自分の氣に入つたようなものを求めて、それを袖子にあてがつた。ちょうど袖子があの人形のためにいくつかの小さな着物を造つて着せたように、父さんはまた袖子のために自分の好みによつたも

のを選んで着せていた。

「袖子そでこさんはかわいそうです。今のうちに紅い派手あかばでなものでも着せなかったら、いつ着せる時があるんです。」

こんなことを言つて袖子をかばうようにする婦人の客なぞがないでもなかったが、しかし父とうさんは聞き入れなかった。娘の風俗なりはなるべく清楚せいそに。その自分の好みから父さんは割り出して、袖子の着る物でも、持ち物でも、すべて自分で見立ててやった。そして、いつまでも自分の人形娘にして置きたかった。いつまでも子供で、自分の言うなりに、自由になるもののように……

ある朝、お初は台所の流しもとに働いていた。そこへ袖子が来て立った。袖子は敷布をかかえたまま物も言わないで、青ざめた顔をしていた。

「袖子さん、どうしたの。」

最初のうちこそお初も不思議そうにしていたが、袖子から敷布を受け取って見て、すぐにその意味を読んだ。お初は体格も大きく、力もある女であったから、袖子の震えるからだへうしろから手をかけて、半分抱きかかえるように茶の間の方へ連れて行った。その部屋へやの片すみに袖子を寝かした。

「そんなに心配しないでもいいんですよ。私がいいようにしてあげるから——だれでもあることなんだから——きょうは学校をお休みなさいね。」

と、お初は袖子の枕まくらもとで言った。

祖母^{おばあ}さんもなく、母^{かあ}さんもなく、だれも言^いって聞^きかせるものがないような家庭で、生まれて初めて袖子の経験^{しゅすのけんけん}するようなことが、思いがけない時にや^やつて来^きた。め^めったに学校を休^{やす}んだことのない娘が、しかも受験前^{しけんぜん}でいそがしがつている時であ^あつた。三月らしい春の朝日^{あさひ}が茶の間の障子^{しょうじ}にさして来^きるころには、父^{ちち}さんは袖子を見^みに来^きた。その様子をお初^{おはつ}に問^といたずねた。

「えい、すこし……。」

と、お初^{おはつ}はあいまいな返事ばかりした。

袖子は物も言^いわずに寝苦^{ねくる}しがつていた。そこへ父^{ちち}さんが心配^{しんぱい}してのぞきに来^きるたびに、しまいにはお初^{おはつ}のほうでも隠^{かく}しきれなかつた。

「旦那^{だんな}さん、袖子^{しゅす}さんのは病氣^{びやうき}ではありません。」

それを聞くと、父^{ちち}さんは半信半疑^{はんしんはんぎ}のまま、娘のそばを離^{はな}れた。日ごろ母^{はは}さんの役^{やく}まで兼ねて着物の世話^{せわ}から何^{なん}からい^いっさいを引^ひき受^うけている父^{ちち}さんでも、その日ばかりは全^{ぜん}く父^{ちち}さんの畠^{はたけ}にないことであ^あつた。男親^{おとこ}の悲^{かな}しさには、父^{ちち}さんはそれ以上のことをお初^{おはつ}に尋^{たず}ねることもできなかつた。

「もう何時^{なんじ}だろう。」

と言^いつて、父^{ちち}さんが茶の間にかか^かつている柱時計^{はしらどけい}を見^みに来^きたころは、その時計の針^{はり}が十時^{じゅうじ}をさしていた。

「お昼^{ひる}にはいさんたちも帰^{かえ}つて来^きるな。」と、父^{ちち}さんは茶の間のなかを見回^{みまわ}して言^いつた。「お

初、お前に頼んで置くがね、みんな学校から帰って来て聞いたら、そう言っておくれ——きょうはとうさんが袖ちゃんを休ませたから——もしかしたら、すこし頭が痛いから——」

父さんは袖子の兄さんたちが学校から帰って来る場合を予想して、娘のためにいろいろ口実を考えた。

昼すこし前にはもう二人の兄さんが前後して威勢よく帰って来た。一人の兄さんのほうは袖子の寝ているのを見ると黙っていなかった。

「オイ、どうしたんだい。」

その権幕に恐れて、袖子は泣き出したばかりになった。そこへお初が飛んで来て、いろいろな言い訳をしたが、何も知らない兄さんはわけのわからないという顔つきで、しきりに袖子を責めた。

「頭が痛いぐらいで学校を休むなんて、そんなやつがあるかい。弱虫め。」

「まあ、そんなひどいことを言って」と、お初は兄さんをなだめるようにした。「袖子さんは私が休ませたんですよ——きょうは私が休ませたんですよ。」

不思議な沈黙が続いた。父さんでさえそれを説き明かすことができなかった。ただただ父さんは黙って、袖子の寝ている部屋の外の廊下を往ったり来たりした。あだかも袖子の子供の日がもはや終わりを告げたかのように——いつまでもそう父さんの人形娘ではないような、ある待ち受けた日が、とうとう父さんの目の前へやって来たかのように。

「お初、袖ちゃんのことはお前によく頼んだぜ。」

父さんはそれだけのことを言いにくそうに言って、また自分の部屋のほうへ戻って行った。こんな悩ましい、言うに言われぬ一日を袖子は床の上に送った。夕方にはおおぜいのちいさな子供の声にまじって例の光子さんの甲高い声かんたかも家の外に響いたが、袖子はそれを寝ながら聞いていた。庭の若草の芽も一晚のうちに伸びるような暖かい春の宵よながらに悲しい思いは、ちょうどそのままでのように袖子の小さな胸をなやましくした。

翌日から袖子はお初に教えられたとおりにして、例のように学校へ出かけようとした。その年の三月に受けそこなったらまた一年待たねばならないような、だいじな受験の準備が彼女を待っていた。その時、お初は自分が女になった時のことを言い出して、

「私は十七の時でしたよ。そんなに自分がおそかったものですからね。もっと早くあなたに話してあげるとよかった。そのくせ私は話そう話そうと思ひながら、まだ袖子さんには早かろうと思つて、今まで言わずにあつたんですよ……つい、自分がおそかったものですからね……学校の体操やなんかは、その間、休んだほうがいいですよ。」

こんな話を袖子にして聞かせた。

不安やら、心配やら、思い出したばかりでもきまりのわるく、顔のあかくなるような思いで、袖子は学校への道をたどった。この急激な変化——それを知ってしまったえば、心配もなにもなく、ありふれたことだというこの変化を、なんのゆえであるのか、なんのためであるのか、それを袖